



12月中旬に来日したイスラエルとパレスチナの少年柔道チームは、20日に講道館少年部と合同稽古を行った。

# イスラエルとパレスチナの少年柔道チームが来日

## 合同稽古、サニックス旗出場で交流

2010年12月、イスラエルとパレスチナの少年柔道チームが来日し、合同稽古や試合出場で交流した。これは山下泰裕・東海大体育学部長が理事長を務めるNPO法人柔道教育ソリダリティーの活動の一環。「交わることのない子供たちが交わり、お互いに理解し合ってもらいたい」と、山下理事長は今回の活動について話す。両国の少年たちは約2週間行動をともにし、親交を深めた。

文/平田淳一 写真/小河原友信

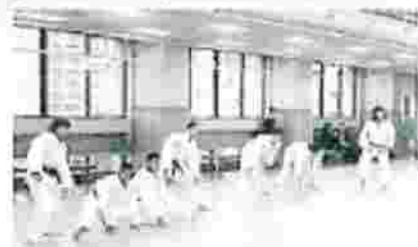
**山**下理事長は2010年7月にエルサレムを訪れ、2000年シドニー五輪100kg級金メダリストの井上康生氏とともに、イスラエルとパレスチナの少年たちのために合同柔道教室を開催した。長い歴史の中でユダヤ人迫害や、イスラエルのパレスチナ侵略など、両国の間には激しい対立がある。同地を訪れた山下理事長は「両国には悲惨な歴史、憎しみがある」と、現実を目の当たりにしてきた。その中で、柔道の活動を通して、少しでも世界の平和構築に貢献できないかと、今回の少年柔道チーム来日を実現させたのだ。

両チームは12月中旬に来日し、東海大道場などで練習。12月20日には東京・春日の講道館で、講道館少年部と合同稽古を行った。「スポーツで何かを変えられるなんて、そんな大それたこ

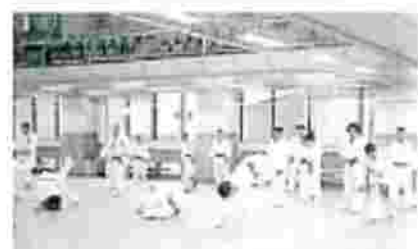
とをやるかとは思っていない」と言う山下理事長。ただ、柔道は相手がいる、組み合うからこそ、今回のような活動に意義がある。

「嘉納治五郎師範の柔道の理念、哲学は相手を尊敬、感謝すること。それがなくなったら、ただの格闘になってしまう。勝ち負けではなく、よりよい社会をつくっていく。人づくり、人間教育が柔道の魅力。柔道衣を着て、組み合うことを通して、お互いのイメージが変わってくる」

**異**文化交流の必要性を説く山下理事長は、そのように柔道の持つ力を話す。戦う相手は敵ではない、相手がいるからこそ、柔道ができる。そんな日本の、柔道の和の心を世界に広めたいと考えている。国と国とが対立している両国の少年たちも、来日して



ランニング、高校体操から稽古を開始



前回の受け身などでも身体的動きを見せていた両チームの少年たち

一緒に行動することで親交を深めていった。「柔道で組み合うことを通して、同じ人間なんだなと思えるようになる。そうして、相手の立場になって物事を考えれば、見えるものが全然違ってくる。帰国したら、子供たちは周りの人たちにそのことを話すでしょう。大それたことは考えていないが、地道な積み重ね」と、山下理事長は語る。

両チームのメンバーは13歳から15歳。講道館での合同稽古では、捕強運動から寝技の乱取り、立ち技の乱取りなどで約1時間半、汗を流した。これまでオリンピックメダリストも輩出しているイスラエルの少年たちは、体格もしっかりしていて、柔道も形になっている。13歳のフライリッシュ・ヨエルくんは「合同稽古は楽しかった。日本人は技が上手なので、少し難しかった